

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

| | |
|----------------------|-----|
| 黄土高原～厳しい旱魃のなかで | P 2 |
| 試行錯誤の努力に敬意 | P 3 |
| 二風谷の人と自然にふれて | P 6 |



万里の長城もところによって表情を変える (天鎮県)

GENに参加するには

- ☆会員・会報購読者になる
- ☆自然と親しむ会・講演会・報告会・学習会に参加する
- ☆ワーキングツアーに参加する
- ☆ビデオ『黄土高原に緑を!』を見る
- ☆使用済みテレカ・オレカを集めて送る
- ☆KDD グリーンアースダイヤルに登録する

etc. あなたのご参加を待っています!

1997・9

57

黄土高原の緑化協力

～ 厳しい旱魃のなかで

9月7日にテレビ朝日系列の「素敵な宇宙船地球号」で、緑の地球ネットワークの緑化協力活動が放映されました。その後、たくさんの方から、電話が殺到しています。ゆっくりお答えできないばあいが多いため、その後の状況をちょっとおしらせいたします。

● 厳しい旱魃のなかで

97年、黄土高原は激しい旱魃にみまわれました。大同の北部の県がとくにひどく、私たちになじみの深い天鎮県李二烟村などでは、清明節（4月5日ごろ）以降、7月下旬まで、雨らしい雨が降らない状態でした。トウモロコシは1mに足りない状態で穂がで、マメは20cm以下で小さな実をつけ、ジャガイモにはまったくイモがついていません。あの大自然災害の95年より深刻だ、という声もありました。

そのうえに、イナゴの害が発生し、1平方mあたり15匹を数えるまでになっています。人力ではとうてい駆除できないので、7月15日ごろからおおよそ2週間、飛行機をつかっての農薬の空中散布がおこなわれました。アオムシが大繁殖し、アブラナなどの葉をスジだけにしているところもありました。

ふしぎに思ったのは、アキアカネの群です。バスのフロントガラスにたくさんぶつかり、つぶれてガラスを汚します。交尾しているものが多く、朝露で湿ったアスファルト舗装の道路を水面とまちがえるらしく、そこに産卵しているのが哀れです。水のない黄土高原で育つわけがありませんから、ずっと遠くから飛んできているのでしょう。

● 新しいころみ～井戸を掘る

そういうなかで、GENの緑化協力は新しい1歩を刻みつつあります。

テレビ番組のなかの水不足の村、広霊県苑西庄村では、井戸掘りにチャレンジすることになりました。その後の調査によって、新しい水脈が発見されました。

取材スタッフと別れたあと、ワーキングツアールといっしょに訪れた霊丘県の招待所で、流暢な日本語を話す青年

が訪ねてきました。8年ほどまえ埼玉農業大学に留学していた王徳貴さんで、貧しい農村の自立を援助するために、省の水利専門家といっしょにこの県に1年間駐在しているのだそうです。

さっそく事情を話して、となりの県での調査を依頼し、快く引き受けてもらいました。まさに渡りに船です。そのとき、私たちの大同事務所通訳の王萍さんが、「王徳貴さん、久しぶり！」と彼に話しかけました。王萍さんも8年ほどまえ埼玉医科大学で研修しており、そのときの顔見知りだったのです。せまい中国では、こういうことがしばしば起こります（！）。

放映直前にテレビ朝日取材班のメンバーと東京であつたら、「その場面をぜひ撮影したかった」といわれました。でもそれが放映されたら、視聴者からは「ヤラセ」と思われるでしょう。あまりにできすぎているからです。

調査によると、水脈は村の東がわ、地下150mのところにあるようです。すぐにでも着工したいのですが、機械によるボーリングは1m1,000円（1元＝15円）かかりますから、ポンプその他をいれると20万円ほどになります。うれしさの半面、頭の痛いことです。

いずれにしろ、私たちの協力は、農民の短期の利益、中期の利益、長期の利益と結びつけていかないと、うまくいきません。その意味では、この村での協力活動は、私たちにとって新しい典型になるかもしれません。

● 菌根菌を育苗に活用

小川真さんの指導で、この春、「地球環境林センター」ではじめた菌根菌活用の育苗



アブラマツの苗木。菌根菌を利用したもの（左）とそうでないもの（右）

実験は、わずか3か月で顕著な効果が見えています。一般の苗にくらべ、地上部にも差がでていますが、かんじんなのは地下の根です。ずいぶん力づよいうえに、これから伸びる新しい根がたくさんついています。来年の春ごろには、決定的な差がつくでしょう。もう1年実験したうえで、周囲の苗圃などにも普及していきたいと思っています。

大同県の「緑の長城計画」の造林地で、マツが枯れ死している問題については、何人かの専門家の鑑定で、とくに悪い病虫害が発生しているわけではなく、気候的な問題が大きいようです。想定していた最悪のケースは避けられたようです。9月16日から、また専門家の人にいっしょに現地調査にでかけてもらいますので、その結果を待って、次回にまとめて報告することにいたします。（高見邦雄）



遇駕山造林地のマツ枯れを心配する袁さん



海外ボランティアキャンプを終えて

試行錯誤の努力に敬意

池田 雅彦 (富士ゼロックス端数倶楽部国際G)

私たち「富士ゼロックス端数倶楽部」の男性11名、女性4名のメンバーは、6/28~7/4の1週間、中国北部の山西省大同市周辺に広がる黄土高原での植林ボランティアに行ってきました。

黄土高原の荒涼とした広大な丘陵地に、松の苗木を1本1本手作業で植えたり、小学校の果樹園でアズノの苗木を植えたりと、多少なりともお手伝いすることができました。現地の人びとは、“この土地にあう樹木が必ずある”と信じて、いまま試行錯誤しながら活動しており、地道な努力には敬意を表するとともに、この地域での緑化活動の難しさを感じることができました。そして、“環境問題に国境はない”とおっしゃった高見事務局長の言葉は、

遠い彼らの世界の問題でなく、私たちにも関わってくる問題であるということに改めて認識させられました。また、貧しいけれど笑顔がすてきな村人たちとの交流も思い出深いものがありました。

GENのスタッフの方々や、この地域での推進役である「緑色地球ネットワーク大同事務所」、「大同市青年連合会」のみなさんをはじめ、現地の人びとの理解と協力によって、私たち「第3回端数倶楽部海外ボランティアキャンプ」を無事おえることができ、大変感謝しております。今後ともこのような活動を通じて、ボランティアの



地球環境林センターでマツのポット苗をつくる

輪を広げ、アジアの人びととの友好を深めていきたいと思っています。



報告会

中国黄土高原の緑化協力 ~6年目のいま

大同周辺の黄土高原での緑化協力も6年目をむかえて協力のはばもひろがり、さまざまな問題点もみえてきました。植樹後10~20年たったマツの枯れ死がみつかり、周囲に影響があるのではないかと心配です。一方で菌根菌利用の育苗は新しい可能性をしめしてくれます。そんな現状を、2人の専門家に率直に語っていただきます。

●日時：9月30日(火) 18時30分~20時30分

●場所：阿倍野市民学習センター
(地下鉄谷町線「阿倍野」駅7番出口すぐ、JR・地下鉄「天王寺」駅/近鉄「阿倍野橋」駅徒歩8分、あべのベルタ3F、TEL.06-634-7951)

●報告：立花吉茂さん (GEN代表、花園大学教授)

小川真さん (関西総合環境センター生物環境研究所所長)

●参加費：700円

●問い合わせ：GEN事務所まで

クマが住める森取り戻そう 和歌山でのこころみ

GENの会員でもある魚谷久美子さんが、「こんな活動に参加しています」と“紀伊山地野生鳥獣保護友の会”の資料を送っていただきました。

1990年4月、和歌山県の山頂の株穴に住むクマの親子が発見され、実害はないのに予察有害駆除によって母親と子ども1頭が射殺されました。残された生後2か月の雄の子グマ1頭は、元鳥獣保護委員の東山省三さんにあずけられました。

「山頂で平和にいるクマを、人里においてきたら危険だからと駆除するのか」。太郎と名づけた子グマを育てながら、東山さんは「クマの住める森」づくりをはじめたのです。

ツキノワグマは環境庁によってレッドデータブックで「希少種」とされ、とくに西日本の生息地では絶滅が危惧されています。しかし和歌山でも人工造林がすすみ、クマのえさとなる木の実をつける広葉樹の森は急速に減りました。さらに、掘割観光道「高野龍神スカイライン」が、紀伊半島を横断する山脈を遮断し、奈良県側への移動を

さえぎってしまいました。

東山さんは山林の持ち主はじめたくさんの人の協力をえて、有田郡にクルミやクリなどを主にした造林地を完成、現在伊都郡で第2の造林をすすめています。また、植えた木が実をつけるまではと、協力者から送られた木の実を山に運んでまいたり、山芋をうえたりしています。クマだけではなく、ほかの野生動物も食べに来るそうです。

クマ、イノシシ、タヌキ、カモシカ、サル……開発によって住みかを奪われ、人里において残飯をあさったり、農作物を荒らしたりして害獣として追われる野生動物たち。豊かな自然林があれば共存できるはずなのに、それを破壊したのは私たち人間です。取り戻すための努力をするのも、私たちのつとめではないでしょうか。

【紀伊山地野生鳥獣保護友の会連絡先】
TEL/FAX.0734-92-5078

子どもたちの未来を思いながら……

夏の黄土高原で

夏の黄土高原ワーキングツアーは、19歳から80歳まで35人が参加しました。今回は五台山を訪ねたので大同での滞在が短かったのですが、やはり農村でのことがいちばん印象に残ったようです。ツアーの日誌からすこし抜粋します。また、留学中の北京からツアーに参加した中田さんから感想のお手紙をいただいたので、その一部もご紹介します。

●列車の中からボンヤリと明るくなっていく外を眺めていると、草原と畑が交互にあらわれたが、その緑のあやかさは、土色一色であった春の姿からは考えられない。

列車から見るとそれなりに育っているように見えた作物も、今年は干ばつで育ちが悪いということを知った。とうもろこしは、背丈の小さいまま実をつけてしまい、じゃがいもに至ってはほとんど収穫が期待できないようである。つらい話だ。(7月25日・長坂健司)



霊丘県でモンゴルマツの補植をする

●午前中は、照壁村でアンズの補植作業を子どもたちといっしょにおこないました。作業を手伝う子どもたちは、みんなとてもかわいらしくて、先のことを考えると若干の不安をもつ、小生の心を元気づけてくれたような気がします(この気持ち、うまくあらわせませんが、作業をやったことのある人ならわかってくれる。やったことのない人にも味わってもらいたい!)。数年後に今日のアンズがどうなっているか、とても気になるとともに、今日いっしょに作業をした子どもたちがどうなっているか、も知りたくなります。(7月26日・広瀬隆之)

●昼食は落水河郷の中学校の教室で村の人たちの手料理をいただく。とりの丸焼き、鯉の丸煮、なすの煮つけなど、心のこもった大ごちそう。何よりもジャスミン茶の香りあるおいしさ。

隣の部屋では中学生がおしゃれをして待っていてくれた。みなとても人なつこく素直で、すぐ私たちのまわりにあつまってくる。英語で話すグループ、折り紙のグループなど、反応はあつく、言葉でない何かがかよいあうひとときであった。(7月27日・栄永頼子)

●実際、今回のツアーでは、地域による格差がものすごく大きいと感じました。いままホテルの外は音楽が鳴り響き、人びとのざわめきが絶えませんが、数日前に作業をしにいった村、キノコ採りにいった日に昼食をごちそうになった村のことを思い出すと、いったいこの差は何なんだという思いです。

今回のツアーで見た中国は、本当にほんの一部でしかありません。それでも中国の農村を見たこと、黄土高原というものを見たことは自分にとって何よりのことでした。(8月1日・遠田和郎)

留学生の視点— 都市と農村の格差を痛感

●何よりも驚いたのはそこに暮らす人びとの善良、純朴さが私がいままで見てきた漢族とは似てもつかない点です。旅行に行けばだまされないよう、ひたすら外国人であることを隠したり、神経をつかっていたものだが、昼食をごちそうになった農村はまるで、どこかの少数民族の村にでも迷い込んだのではと錯覚したほどだった。彼らは本当に心から歓迎してくれていると感じた。そしてまた彼ら農民とは通訳を介さねば会話できないことが残念でもあり、中国の大きさだと思った。

現在北京で普通語を勉強し、生活しているが、たまに耳にするのが地方の人びと、農民

への差別です。「農民は普通語が話せない」とか、「彼らとは勉強するな、汚いなまりがうつる」などなど。自分たちの学校、宿舎が粗末であると言いながらも進んで見せてくれた中学校の先生、生徒や、昼食を食べずに私たちの到着を待ち、いっしょうけんめい接待して下さったあの農家のおばさんを思うと、こんな差別的な言葉を聞かされた腹立たしくなる。大都市の人びとは彼らの生活を知っているのか？(中略) たまたま北京の人は北京に生まれ、移動が自由でない中国で北京戸籍をもち、同時に教育の機会にも恵まれていただけだろう。彼らをけなす権利などどこにもないと思う。

現在中国の大きな問題、貧富の格差の開きはもちろん都市内にも存在する。しかし都市と農村の開きは想像を超えており、おまけに両者のあいだには互いのことを見たり、聞いたりするパイプがまるっきり存在しないことも大きな問題である。(中略) このような機会を与えられたからには、この見聞をとにかく広めていきたいと考えています。よその、外国人が口をだせば少しは耳をかすかもしれない。そしていっしょに木を植えた輝く笑顔をもった子どもたちの心にも環境保護の苗木が植えられたなら、それは将来とても大きな実となるはずです。(中田洋之)



補植したアンズに大切な水をかける子どもたち



世界の森林と日本の森林 (その11)

立花 吉茂 (緑の地球ネットワーク代表)

人為的に砂漠化した地域

前回には自然の砂漠地帯について考えてみた。今回は人為的にできた砂漠地帯、いわゆる砂漠化した地域について考えてみよう。これは、熱帯や温帯にもできるが、日本には起こらない現象である。日本では、いくら木を切り倒しても草が生え、先駆の樹木が生え、二次林となり、ちゃんと森林が復活してくれる。暖かさど湿り具合が一致するからである。暖かい地域では蒸発量が多いから、かなりたくさんの雨が降る必要がある。日本は夏場に雨が降り多量から砂漠化が起こらないのである。雨量が不足すると伐採後には土壌浸食が起こり砂漠化が始まる。また、寒さのために砂漠化が起こることもある。寒

さのために草原しかできない地域と森林との境界付近では、いったん伐採されると森林は復元できず、砂漠化が進行する。われわれが緑化協力している中国山西省の黄土高原はこれである。

熱帯雨林の砂漠化

東南アジアのタイ国には雨緑林が多い。日本の照葉樹林に似てもう少し樹高の高くなる森林で、熱帯雨林と見まがうような立派な森林もある。この森林が伐採されて「捨てられた土地」になった地域の緑化のお手伝いをしたことがある。伐採後、草が生えるのでそこに家畜が放される。家畜は樹木の芽生えもいっしょに食べてしまう。また、熱帯だから、土壌中の有機物の分解が早いので数年後には土壌中の栄養物が

全部分解してしまい、草も生えなくなってしまふ。乾季と雨季とが交替やってくる地域だから、雨季の雨足は強い。草も生えていない土は雨に流され強烈な土壌浸食が始まる。こうして濁流が川に入り、砂漠化が進行する。強い雨が降る季節があるのに、砂漠化するのである。このような砂漠化地域が世界中に広がっているのである。

自然の砂漠地帯の緑化を進めるよりも、いま地球に急がれるのは砂漠化した地域の緑化である。元森林地帯は植えてやれば復活が間違いなく成功する。われわれは自然に逆らうことをしてはいけない。われわれが自然を壊した場所をわれわれが元に戻すことが急務なのである。

GEN自然と親しむ会

森の中のキノコの働き

今春にはじめた実験の経過も良好で、大同でのマツの育苗に大きな役割を期待されているキノコ(菌根菌)。でも、日本の森のなかでどんな役に立っているの? 実際に森を歩いてキノコを探しながら勉強してみましよう。

- 日時: 10月10日(金・祝日) 10時~15時
- 場所: 大阪市立大学理学部附属植物園(大阪府交野市私市2000、TEL. 0720-91-2059)
- 集合: 京阪電鉄交野線「私市」駅前に午前10時
- もちもの: 弁当、水筒
- 参加費: 大人100円、小人(中学生以下)20円(保険料・植物園入園料ふくむ)
- 案内: 小川眞さん(関西総合環境センター生物環境研究所所長)
立花吉茂さん(GEN代表、花園大学教授)
- 定員: 40人
- 申し込み: 10月7日までにGEN事務所まで(定員に達し次第締切ります)

緑の中国 歴史篇 14

上田 信 (立教大学教授)

楚の国は、中国の春秋戦国時代の南方の強国として知られます。近年の考古学上の発見などから、その文化が中原のものとは大きく異なり、独自性を持っていたことがしだいに明らかになってきました。その個性は、物質文化に限りません。文学のなかにも見ることができます。そこで注目されるのが『楚辞』です。

『楚辞』といえば屈原といわれます。しかし『楚辞』に収められた作品を見ると、とても一人の人物が創作したものとは思えません。「離騷」などの数編は、あるいは屈原のオリジナルとしても、たとえば「九歌」としてまとめられる作品群は、楚の国の儀礼のなかで歌われていたものではないかと思われれます。個人の心情をつづったものというより、祝詞に近いということになります。

「九歌」は九篇の歌で、それぞれが神にささげられたものなのですが、なかに一篇、奇妙なものがあります。

「山鬼」と表題が付されたものです。この歌は、山のなかに住み、木に附着している地衣類を身にまとい、ツタを帯とし、タヌキにひかせた車に乗った山鬼にまつわるものです。歌の内容は次回に紹介するとして、まずここで問題としたいのは、歌の視点です。

山鬼とは何なのか、さまざまな説が出ています。山のなかにいる女神ではないのか、山の神への祭祀をおこなう巫女ではないかという穏当な説。あるいは、野人(中国で雪男のように未確認の生物をこう呼びます)ではないのかといった、少しギョッとする説もあります。山鬼は何かということとはともかく、この歌の視点は山鬼により添っていることは重要なポイントです。ツタが大木にからみ、地衣類が太い幹や枝からたれさがっている、こんな常緑の南方の森が、歌を読んでいると目に光景としてうかんできます。森のなかに足を入れず、その外側に視点をおく『詩経』とは、大きく異なるのです。

ナショナルトラスト『チコロナイ』の現地

二風谷の人や自然にふれて

今年も夏の恒例の行事、二風谷現地宿泊研修会が催されました。3泊4日の二風谷子供キャンプは16人、5泊6日の二風谷ワーキングツアーは部分参加も入れて14人が参加しました。今年は、大学生がたくさん参加して一段と活気のあるものになりました。それぞれの参加者の感想文を一部紹介します。全員の感想文集は後日完成予定です。

二風谷ワーキングツアーに参加して

●「ツアー」というと、訪れる土地がある意味では無責任に踏みこんで通り過ぎていくものかもしれませんが、今回二風谷でお世話になり、これまで自分がいかに無責任にあちこち歩いてたかを強く感じました。もちろん、どこかへ行くと考えさせられることはたくさんあります。でも、自分の中で完結させてしまいがちだったし、自分中心だったと思います。私のなかには、自分が嫌なことは人も嫌だろう、自分が気持ちいいと思うことは、たぶん人も同じに思うだろうという気持ちがあって、自分が気がつくこと、できることをしようと心がけているつもりです。

でも二風谷で感じたことは、そんなのほほんとした考えだけではとても答えが出そうにないものばかりです。「今がよければ」的な考えにおちいりやすい私には、今までこんなに歴史の重さを考えることがなかった気がするし、あたり前のように「日本人」だと思ってきました。日本人って何？ 言葉って何？ 一今、いろんな疑問が頭の中、心の中をぐるぐる回ります。人間は同じ人間ということ、平和とは、みんなが仲よくすることというだけでは世の中はうまくいかないのかな。

二風谷で印象に残ったひとつに、お世話になった方みんながとにかく素敵

な人たちばかりで、笑顔がまた最高。貝澤美和子さんには、「毎日が楽しそうですね。」なんて言ってしまいました。今、はやくもう一度、二風谷に行きたくて仕方がないという感じです。(後略) 山本香代子 (大阪府)

●まず、最初に言っておきたいことは、「すんげー、すんげーおもしろく、奥の深いツアーだった。僕の世界が広がり、そして、増えた、そんなツアーだった」ということだ。

味のあるオッサンたち、おねえさんたち、オッサンの娘、大学生、そして、女子大生3人組、いろんな世代の人たちと一緒に生活し、話を聞き、話をし、とてもおもしろく、この先の僕の人生で思うように、感じたままに生きること自信を得させてくれた。そう、誰かが言っていた。

どんなに美しい花でも、そればかり毎日見ていると飽きてくる。いろんな花があり、いろんな人がいるからおもしろい。自分とは違うから学ぶことができる。多様性を認めると。(中略)

他にもいろんなことがあった。イモ掘り、キャンプ、盆おどり、木ぼり、アイヌのおどりを教えてもらう、交通事故で死んだシカの解体、畑の網に捕まったキタキツネ、チコロナイの森で気に入った木に自分の札をつける、そして、その帰り出会った放し飼いの馬とのふれあい。北海道で出会った動物たちは、オリの中で飼われている動物たちとは違い、生きた瞳をしており、とてもうれしかった。

僕はこのツアーに参加し、自分自身が成長したような気がする。僕は僕が思う人間になり、感じたままに生きたい。そして、日本人として心に日本を、日本文化を持って生きていきたいと思うようになった。

まぼろしのような
まぼろしでない

確かなものがこの胸の中に
確かなものがこの胸の中に
北田義幸 (大阪府・18歳)

二風谷子供キャンプ参加者の感想

●(前略) 今回私が一番不安だったのは「料理」でした。それは、送られてきた班分けの紙に書いてあった炊事班が、両親に聞いていた通り子供だけだったからです。おかげで数日間、「練習」と称して、母に夕食を作らされました。でも、その練習をしたかきがあって1日目のカレーはおいしくできて、少しほっとしていました。(中略)

そして、感動したのが、星でした。流れ星や数えきれないほどの星を初めて見て、このキャンプに参加してよかったなあと思いました。楽しかったのが、アイヌの踊りと木彫りでした。踊りは少し恥ずかしかったです。木彫りでは、「あんたが彫刻刀を使うと必ずケガをする」という友達の言葉を信じてしまうこととなりました。そして、彫ったコースターは、私の愛用品の1つになっています。博物館は、アイヌの人々の使ったものなどがあり、とてもおもしろかったです。(中略) 今度はできたら友達も連れていきたいです。下田理美 (大阪府・中学1年)

●(前略) 二風谷でのキャンプで一番心に残っていることは、子供たちがとてもいきいきとした顔をしていたことです。キャンプというのは、子供たちにとって、もちろん大人たちもですが、とても楽しいものです。それに加えて北海道の豊かな自然と、また、その自然が調味料となった食事などを食べていると、子供たちの顔も当然いきいきとしてくるんだなあと思いました。(後略) 藤原正和 (滋賀県・大学生)

●(前略) 最後に、アイヌのことについて書きます。私は今回のキャンプで



富良野・東大演習林の原生林で

アイヌについてたくさん学びました。アイヌの文化である木彫りやししゅうを教えてもらったり、踊りを教えてもらったり、資料館に行ったり、かなり密接にアイヌの方がたと関わりました。同じ日本に住んでいるのに、アイヌのことについて全く無知なことに私は恥ずかしく思いました。アイヌの歴史の中での差別や、強制的に日本文化へ同化させられたことや、そういったことをもっと知らなければならぬと思いました。大自然の中の二風谷や、協力しあったキャンプ、温かく接して下さったみなさん、味のあるアイヌの方がたとのふれ合い、今回のキャンプは、私にとって大学の勉強を越えた、とても意味のあるものだったと思います。福元絵理 (奈良県・大学生)

● (前略) 今回のキャンプで最も印象に残ったことは、キャンプそのものや、踊りもそうですが、やはりアイヌの人びとが、自分たちの文化を守ろうとし

ており、また、自分たちが日本人とは別の民族であると考えているということでした。日本人がアイヌの人びとを支配してきたことをこれ程感じたことはありませんでした。

北海道から帰ってから、高校の時にアイヌのことを学んだ学校のプリントを読んでも、日本人がいかにアイヌの人びとを差別し、支配してきたかについて考えさせられました。そのプリントを読もうと思ったのは、高校時代の半ば強制的のものではなく、自らの意志でした。この違いは、実際にアイヌの文化や人びとに触れ、出会ったからにはほかなりません。実際にその文化に触れることがいかに重要なかということがよくわかりました。

これからも二風谷でのキャンプが続



アイヌ古式舞踊を楽しむ (鶴の踊り)

けられ、より多くの人びとがアイヌの文化に触れ、アイヌに対する偏見をなくし、理解が広まることを期待しています。多胡亮 (滋賀県・大学生)

第2期計画 現状報告

第2期計画も残すところ3ヶ月あまりになりました。

8月31日までで、第1期計画からの繰越金も入れて合計3,625,886円になりました。寄付された方は、第1期も入れて397人です。第1期でチコロナイの輪に加わられた方で、第2期がまだの方は金額はわずかでもけっこうですから、ぜひ続けてご協力をお願いいたします。新たに加わる方も大歓迎です。

第2期の募金目標は700万円でした。これを達成し、チコロナイの輪をますます広めていくためにも、多くの方々の積極的な参加を呼びかけます。

【連絡先】

- ・緑の地球ネットワーク事務所
 - ・武田繁典 〒546 大阪市東住吉区今川6-2-6 TEL/FAX. 06-704-7720
 - ・貝澤耕一 〒055-01 北海道沙流郡平取町二風谷31-3 TEL. 01457-2-2089 FAX. 01457-2-3991
- 郵便振替 00900-2-5202チコロナイ

チコロナイアイヌ語講座

～いやでもわかるアイヌ語～
第3期第2回

- 日時：9月27日 (土) 14時～16時
- 場所：GEN事務所
- 資料代：第3期 (6回) 分で2,000円
- 問合せ：平石清隆 (TEL. 0745-23-5627)
- ★テキスト：『エクスプレス・アイヌ語』(中川裕、中本ムツ子著・白水社) 飛び入りも大歓迎。(400円)
- ★10月は25日の予定です (学習会も)。

チコロナイ学習会のご案内

7月の学習会が台風で流れたので、同じ内容でおこないます。待望の佐藤

さんの「語り」を聞くことができます。夏の二風谷現地宿泊研修会の報告も合わせておこないます。ぜひどうぞ。

- 日時：9月27日 (土) 16時～18時
- 場所：GEN事務所
- 内容：アイヌと日本の昔話の「語り」と絵本の紹介 佐藤奈美子
- 参加費：100円+カンパ
- 問い合わせ：武田繁典 (右記)

チコロナイ通信のお知らせ

チコロナイ関係の行事予定、「アイヌ語ひとくちメモ」などを載せた「チコロナイ通信」を毎月発行しています。郵送ご希望の方は郵送料ともで1年間分1,200円を80円切手15枚を同封のうえ、武田繁典まで申し込んで下さい。



チコロナイ

案内板、ロゴマークできる!

貝澤耕一さんの長女、珠美さんのデザイン、製作で立派な案内板とかわいいロゴマークができました。案内板はシケレペ沢の横の国道と、チコロナイの森の方に入って行く町道との角に設置されてよくめだっています。近くへ行かれた方はぜひ見てください。土台の、大きなカツラの丸太は、菅野茂さんのご提供によるものです。説明板の設置は今計画中です。ロゴマークも今後どのように使うか検討中です。アイデアがありましたらお寄せください。





関東ランチ

“環境NGOセミナー”

環境問題やNGOに関心をもつ学生を中心に学習、討論の場を提供します。

- 10月18日(土) 15時~18時
富沢勇武 (COP3にむけた勉強会)
- 11月15日(土) 15時~18時
倉持幸恵 (中国黄土高原一卒論の構想をもとに)
- 12月20日(土) 15時~18時
話題提供者未定、「COP3を振り返る」
- 場所: 立教大学池袋キャンパス5号館1階・第1会議室 (3回とも)
- ★年明け後も、基本的に毎月第3土曜日にセミナーを開いていく予定です。

チベットの空、中国の大地から
こころの響き...

- 日時: 10月18日(土) 14時~16時
- 場所: ドーンセンター7Fホール (大阪府立女性総合センター/京阪・地下鉄谷町線「天満橋」駅から東へ徒歩約5分/TEL.06-910-8500)
- 出演: バイマーヤンジン (うた)

邱迅 (竹笛) ほか

- 協力券: 2,500円 (小~大学生1,500円、当日券3,000円)
- 主催・問い合わせ・申し込み: 関西日中交流懇談会 (TEL.0797-88-2240)

ワン・ワールド・
フェスティバル '97

- 日時: 10月19日(日) 10時~16時
- 場所: 花博記念公園鶴見緑地 (地下鉄鶴見緑地線「鶴見緑地」駅下車)
- 主催: ワン・ワールド・フェスティバル'97実行委員会 (事務局・関西国際交流団体協議会・TEL.06-773-0256)
- ※ステージ、トーク、模擬店やパネル展示など、関西のNGOがたくさんあつまります。

ユニフェム

チャリティーマーケット

- 日時: 11月1日(土) 11時~18時
- 場所: クレオ大阪西2F研修室 (JR環状線・阪神「西九条」駅徒歩5分/TEL.06-460-7800)
- ※この催しにはGENも大同の切り絵などを持って参加します。そのほか、1日、2日の2日間にわたって、ステー

ジ、セミナー、屋台村などがあります。お問い合わせは上記クレオ大阪西まで。

自然と共生するアイヌの人々
アイヌ文化を学ぶ

- 日時: 11月1日(土) 14時~16時
- 場所: JR吹田駅前サンクスホール
- 講師: 貝澤耕一さん
- 主催: 大阪府国際交流財団
豊中・吹田市・箕面市国際交流協会
- 問い合わせ: 吹田市国際交流協会 (TEL.06-835-1192)
- ★前夜(10月31日)に貝澤さんを囲んでの歓迎交流会も計画しています。問合せはGENチコロナイ部会・越智誠一さん (TEL.0720-34-4354) まで。

新作ビデオの普及に
ご協力ください!

- ビデオ『森よ、よみがえれ!』 (VHS・カラー・28分)
- 価格: 5,000円 (GEN会員価格4,000円・送料270円)
- 環境事業団地球環境基金製作協力/文部省選定/環境庁推薦/林野庁推薦/中華人民共和国駐日本国大使館推薦/大阪府教育委員会推選
- 申し込み: GEN事務所まで